

想 い 出

昭和6年春、上野の音校在学中、アルバイトにコロムビアレコード吹き込み所で、「丘を越えて」を歌わされた時、マンドリンオーケストラの中に一人のフィリッピン人がかかえて合奏してたアコーディオンの音色と左右両方の指先きから広い音域を奏せる楽器の魅力にとりつかされたのがはじまりでした。

吹き込み中、歌の方より気分の集中は、その運指が、ピアノの奏法と多少異り、スケールの場合1. 2. 3. の指が主で、4. 5 の薬指、子指を殆んど使わない事の多い点等、ただただびっくりし乍らの一時間でした。

録音方法も今とは異り、マイクは一本きりのワン・ポイントシステム、歌も合奏もソロも、それぞれ必要に応じて、マイクの前に忍び足でやって来て恐る恐る引きさがると云う寸法でした。

春とは云え、スタジオの中は完全密封の為、汗だくだくで吹き込み終了、早速自己紹介で、アコーディオンの奏者に教えを乞う……と切り出したものでした。

彼曰く、「私の名前はフランシス・キニー、ピアノが本職でアコーディオニストではない、だが自分も面白い楽器だと思うので、自己流でやっているのだ。君はピアノを奏せるや？」

藤 山 一 郎



小生は、「ピアノもヴァイオリンもトランペット、ホルンも吹ける、ティムパニーも調律出来る」と答え、急に仲良しになり彼の演奏場、八丁堀ダンスホールへしばしば訪れる事になりました。

その頃、初代A. I. (エーワン) レストランの社長が、ヨーロッパへ行く事が決ったので、「フランスでお土産にアコーディオンを是非買って来て呉れ」と頼み、暮れも押し迫ったクリスマス近くに、ダラッベ(80ベース)が我が手に入った次第です。

楽器は買って来て呉れましたが、メソード(教則本)